

# 脳神経倫理学とは何か？

金沢大学人間社会環境研究科教授  
附属図書館長  
人文学類長  
柴田正良(哲学・倫理学)

Mar. 24, 2010  
於：金沢大学医学類十全講堂

# 脳の倫理学？

Neuro-ethics”は「神経-倫理学」と訳さずに、  
ふつう「脳-神経-倫理学」と訳される。

これは、＜脳＞の機能に関する最近の神経科学の進展が引き起こす倫理的問題がもつぱらのテーマであることを意味する。

# 脳神経倫理学の2つの視点

(1)脳科学に関する倫理学

(2)倫理学に関する脳科学

1. 脳科学が可能とする様々な形での脳への「関与」が引き起こす倫理的問題を検討する。

ここで、「関与」とは、脳活動の正確な計測、画像化、介入、操作などである。

2. 人間のこれまでの倫理や道徳の営みを、脳活動の解釈から説明する。

例えば、道徳的判断、道徳的感情などの特徴を脳活動の特徴に還元する。

# 脳科学に関する倫理問題(1-1)

## 脳活動の読み取り

脳活動の正確な計測がかなり信頼できる「心の読み取り」(マインド・リーディング)を可能とする。 ➡

人の隠された好みや嗜好に狙いを定めた生産戦略やマーケティングが可能。

しかし、法廷の証人の場合に典型的だが、脳計測を嘘発見器として用いる。 ➡

「あなたに殺害の意図がなかったのは本当ですか？」

究極のプライバシー(心の秘密)が不可能になる。

# 脳科学に関する倫理問題(1-2)

## エンハンスメント(能力の増強)

認知能力や感情・気分の脳内メカニズムと神経ホルモンの働きが解明される。 →

頭の働きをよくする薬(スマートドラッグ)や感情・気分を明朗・爽快にする薬がふつうに用いられる。



スマートドラッグはドーピングと同じように、人間の〈自然な〉努力を無価値にしないか？

気分爽快ドラッグは、近親者の死や、悲惨な戦争や、許し難い虐殺などの深い人間的意味を失わせないか？

〈何が起きても気分だけ晴れやかな人・・・？〉

# 脳科学に関する倫理問題(1-3)

## 人格 (persons) の改変

例えば、自閉症の遺伝子診断が可能になり、親が自閉症の子の出生を望まないとする。



〈自閉症者として生まれる〉はずの太郎は、遺伝工学的な操作によって、〈自閉症者でない太郎〉として生まれる。しかし、それは本当に〈太郎〉だろうか？



もっと一般的に、脳への薬理的もしくは外科的介入によって、人はその本質(人格)を変えてしまうかもしれない。それは、倫理的に好ましいことなのだろうか？

## 脳科学に関する倫理問題(2) 幻想としての自由意志と行為責任

脳もまた一つの物理装置である。



いかなる物理装置も、物理法則に従う。



脳もまた、計算機と同じ程には、物理的に決定されている。



- 古典的な意味での自由意志は、先行のいかなる物理的条件によっても決定されていない、ということの意味する。
- 古典的な意味での自由意志は幻想であり、それを前提とする責任概念も空虚である。

# 倫理に関する脳科学的説明の問題

## 倫理の自然化(1)

- 倫理的なものの自律性・・・倫理や道徳は、個人や集団の勝手な妄想ではなく、少なくとも、何らかの客観的な(脳以外の)事象に基づいている。



- この自律性は、これまでも多くの倫理学者によって疑われてきた(自然主義)。 →
- 自然的な性質がまったく同じ2つの事実が、倫理的性質において異なるということはあるだろうか？




# 倫理に関する脳科学的説明の問題

## 倫理の自然化(2)

- 倫理的なものの自律性は、もっと破壊的な意味で、成り立たないかもしれない。
- ふつうの自然主義は、倫理的事実を客観的な事実に戻元する。



しかし、

- 脳科学が可能とする自然主義は、倫理的事実を、各人の脳活動の偶然的で主観的な産物に戻元するかもしれない。 
- われわれの道徳原理の根拠は、普遍的・客観的なものではないかもしれない。

# 脳の世紀における倫理学へ

脳神経倫理学とは、脳神経科学の爆発的な展開がわれわれに突きつける新たな倫理問題を、脳の世紀における倫理の根本的可能性の問いとして扱うものである。

おしまい